

## <ワークショップ報告>

### ①演劇的知を教育活動に取り入れる —パフォーマティブラーニング—

担当者 : Gehrtz 三隅友子 (徳島大学)  
安永 悟 (久留米大学)

概要 : 近年、教育や研修にインプロ (impro, improv) = 即興劇をとり入れる機関や組織が増えている。インプロは、脚本も設定も役も決まらない中で、その場で浮かんだアイデアを参加者が受け入れあい、膨らませながら物語を作り、場面を演じながら作っていく演劇活動である。身体的コミュニケーションを使ったこの手法が、組織や個人の日常を揺さぶり、変化のきっかけを作ることが効果として脚光を浴びている。予測不可能な社会に必要な他者との関係づくり、そしてコミュニケーションの再認識を促す。なぜ教育にこのような演劇的知の導入を勧めるのかに対しては次の五つが挙げられる。これらを教師と学習者が共有することによって、新たな学びの関係を基にした授業が展開できる。

- ①教育の二つのねらい (教えると育てる) に適している。
- ②ケアの概念が保たれる。
- ③コミュニケーションを再考できる。
- ④心と身体とこえの感覚を取り戻せる。
- ⑤個人から全体の「学び」を体感できる。

本ワークショップは、インプロを実際の教室活動 (これまでの講義形式・協同学習形式等以外に) に何らかの形でとり入れることを提案した。ワークショップの最後には活動を振り返り、個人と全体で互いの発見をすり合わせ、何よりも「演劇的知の体感」を共有した。

キーワード : インプロ, 身体的コミュニケーション, 演劇的知, パフォーマティブラーニング

### ②学生の経験を言語化し、学びを深めるライティング指導 —TAE (Thinking At the Edge) をベースにした「経験をことば化する方法」—

担当者 : 成田秀夫 (河合塾)  
山本啓一 (北陸大学)  
得丸智子 (開智国際大学)

概要 : アクティブラーニングが広がり、学生が発信する機会が増えているが、情報を検索して「再発信」するだけに陥ってはいないだろうか。真に発信の「主体」として、学生自身の経験に根ざした思考の発信を促すべきだろう。このような問題意識のもと、私たちの研究グループは、経験から得た知恵 (身体知, 暗黙知) をことばで表現する方法 (「経験のことば化」と呼ぶ) を模索して

きた。今回は、哲学者ジェンドリンが創始し、得丸(2008 他)が表現活動としてデザインした TAE (Thinking At the Edge) をベースに、初年次教育で実施可能な「経験をことば化する方法」を体験することを目的にワークショップを実施した。

この特徴を要約すると、次のようになる。

- ・内省を促し、思考力と表現力を一体のものとして高める
- ・経験を相対化し意味づける文章表現へと、段階的・系統的にプロセスをデザインする
- ・他者との共有や、アカデミック・ライティングへの接続に開かれている

本ワークショップには、大勢の会員に参加いただき、得丸のレクチャー後、「記憶の断片を小カードに書き取り広げて俯瞰する(データ化)→小カードを類似性によりグループにする(グループ化)→グループ内類似性、グループ間関連性を短く表現する(パターン化)→キーワードを選定し主張の核心を論理的に表現する(構造化)」という一連の手順を、時間が許す限り体験して頂いた。

キーワード : TAE, 経験の言語化, アカデミック・ライティング

### ③ 2030 年の初年次教育から見える今 —未来を思うことで今を考える—

担当者 : 田中 岳(東京工業大学)  
立石慎治(国立教育政策研究所)

概要 : 「2018 年問題」に大きな関心が寄せられている。18 歳人口が再び減少に転じ、志願者(入学者)減という現実が切実さを増すからである。そして、その先 2030 年には 100 万人を切ることが見込まれている。各大学は、いよいよ正念場といったところであろう。では、2030 年度の初年次教育は一体どのようなものだろうか。本ワークショップは、大学間のサバイバル競争という課題をあえて保留し、大学関係者として 2030 年の初年次教育を考えてみようとするのがねらいであった。とはいえ、願望や確信からではなく、起こり得る状況(可能性)の吟味を検討の中心に置いた。2030 年に起こりうる将来像を反省的に捉え、現在を再考することに繋げるよう試みた。このプロセスを通じて、現在の初年次教育を動かしている「ドライビング・フォース」をあぶり出し、参加者自らが考える(考えてきた)初年次教育へのアプローチを捉え直す対話を展開した。その検討内容を全体共有するため、『TodaysMeet』というツールを実験的に活用した。なお、プログラムの冒頭には、次のような目標、役割、過程を提示し、構造的なグループワークを進めた。[目標]ワークショップ終了後には、参加の皆さんが、所属大学における課題解決への道筋を自分の言葉で語るができるようになる。[役割]担当者は会場の相互作用を活性する進行に努め、参加の皆さんには主体的な活動をお願いする。[過程]ミニレクチャーとダイアログという対話方法を

織り交ぜながら、各参加者が省察する場を設け、最後に会場全体での共有を行う。

キーワード : 2030年, 組織化(アプローチ), シナリオプランニング, 人口減少社会

#### ④初年次学生に対するプレゼンテーション指導法

担当者 : 長山恵子(金沢工業大学)

概要 : 初年次教育においても座学中心の授業からの脱却を図り、グループ討議やグループ演習などを実施し、その結果をプレゼンテーションさせる授業が増えている。プレゼンテーションの実施にあたっては説明内容の充実度を評価することは当然であるが、聞き手に伝えるための技法(話し方や態度、提示資料の作成方法)も重要であることを併せて指導する必要がある。本ワークショップでは、まずプレゼンテーション技法の説明におけるポイントとその技法を活用するための演習の進め方を説明した。主な説明内容は、授業開始時のアイスブレイキング、発表内容のまとめ方(ストーリー展開)、話し方、提示資料の作成である。さらに、演習を通して学生が自身のプレゼンテーションの良い点と改善点を把握するための評価方法とそのフィードバック方法についても、参加者と共に検討した。また、参加者にはグループを組んで実際に演習の一部を体験してもらい、自身の授業にも取り込むことができることを目指した。参加者同士が話し合う時間を多く取ることにより、情報交換の場としても活用してもらうことができた。

キーワード : プレゼンテーション技法, 動機付け, 評価方法

#### ⑤「学力の三要素」を総括的に育むアクティブ・ラーニング

担当者 : 川島啓二(九州大学)

池田史子(山口県立大学)

久保田祐歌(徳島大学)

概要 : 『高大接続システム改革会議』「最終報告」が提出され、すべての学校段階を通じて一貫した学習目標としての「学力の三要素」を掲げて、それを総括的に育むことが求められていることがより明確になった。学習目標の達成のために、アクティブ・ラーニングの技法を効果的に採り入れること、学習プロセスの自己調整と能動的な学習のために振り返りの機能を適時に組み込むことは、これからの授業デザインとして必然的な方向であると言える。本ワークショップでは、平成26年度にクリティカル・シンキングを育成する授業デザインを、平成27年度にその学習プロセスの評価方法をとりあげてきた。本年度もその延長線上に、「思考力」を他の学習要素から切り離さずに、「学力の三要素」を総括的に捉えて育成する授業デザインをご提案した。シンク・ペア・シェア、ジグソー法、特派員、ポスター・ツアーといった代表的なアクティブ・ラーニングの技法によって構成された模擬授業を行い、3年

間の総仕上げとした。

キーワード : 「学力の三要素」、アクティブ・ラーニング、ジグソー法、グループ学習

## ⑥モデル授業公開検討会(2)：ノートの取り方

担当者 : 藤田哲也(法政大学)

中川華林(法政大学大学院)

概要 : 本ワークショップでは、担当者(藤田)が実際に法政大学で行っている初年次教育科目である「基礎ゼミ」について、実際に模擬授業を行い、授業後に参加者と授業内容や授業運営上の工夫等について意見交換をした。今回は「ノートの取り方」の授業を行った。「ノートの取り方」は、単なるスタディスキルの一つではなく、学生が「大学では自主的・自律的に学ぶ必要がある」ということを頭で理解しているだけの状態から、実際の行動に反映させるべきこととして認識を改めるための、絶好のテーマである。にもかかわらず、授業担当者からは、学生の「ノートの取り方なんて大学で教えてもらわなくても大丈夫」という主張に気圧されて、表面的・形骸的な指導を行うのみで終わってしまうと聞くことが多い。むしろ「ノートの取り方」は、学生に初年次教育全体の意義に気づいてもらえる、最重要テーマの一つであるといえる。本ワークショップでは「授業内模擬授業(中川が担当)」の工夫などを実演しつつ、「ノートの取り方」にいかにして初年次教育の教育目標を反映させられるかについて参加者と討論した。参加者には、前半は学生の視点で授業を受けていただいた。後半の冒頭で指定討論者(中川)から、授業をよりよくするための論点として、「学生にとっての“ノートの取り方を学ぶ必要性”をどう方向付けるか」、「“ノートの取り方”についての学生の自己評価を適正化するには」、「参加者自身の授業に取り入れたい具体的な工夫」を提示し、それらの論点について全参加者で意見交換をした。

キーワード : 初年次教育モデル授業、授業検討会、気づき、シラバス